片桐　美由紀　先生

略歴

2004年	宮城高等歯科衛生士学院卒業
2004年	仙台第一歯科医院勤務
2005～2011年	医療法人東北福祉会　介護老人保健施設せんだんの丘
2014年	社会福祉法人東北福祉会　特別養護老人ホームせんだんの里
2017年	社会福祉法人まほろば　特別養護老人ホームまほろばの里向山

施設歯科衛生士による口腔健康管理と食支援

社会福祉法人まほろば 特別養護老人ホームまほろばの里向山
片桐　美由紀

わが国は諸外国に例をみないスピードで高齢化が進んでおり，国民の4人に1人が高齢者ともいわれ，今後も後期高齢者の人口割合の増加が予測されている。このような状況に対応するため，団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられるよう，医療・介護・予防・住まい・生活支援が包括的に確保される体制「地域包括ケアシステム」の構築を推進している。令和3年度の介護保険制度の改正において，要介護高齢者の誤嚥性肺炎の予防に必要な事項とし，口腔ケアが基本サービスに位置付けられている。その他の加算にも口腔機能の向上や口腔衛生管理が加えられ，歯科へ求められる役割も大きく変化している。だが要介護高齢者の多くは加齢に伴う生理的な機能の低下や複数の疾患をもっており，口腔健康管理においては想像以上に課題が多い状況にある。

当施設では5年前の開所時より歯科衛生士を常勤配置し，入所者に対する口腔健康管理を実践してきた。その中で介護保険施設の人員配置基準にない歯科衛生士を雇用した意味を考え続けてきた。単なる「口腔衛生管理」だけでなく，最後まで自分の口で食べ続ける為には必然的に「口腔機能管理」が必要である。口腔内の課題は全身状態や生活環境にも大きな影響を受けるため，口腔にとどまらない包括的なアセスメントが必要である。だが「歯科医療」の介入があっても機能回復が見込めない状況になった際に，どのような保健指導が求められるだろうか。

施設歯科衛生士として勤務する中で，要介護高齢者の「低栄養・脱水」「誤嚥性肺炎」のリスク管理の観点から，食事状況の把握は欠かすことのできない業務内容の一つである。当施設では定期的に多職種によるミールラウンドを実施しており，要介護高齢者一人ひとりの「食」についての情報を共有している。他職種の専門性を理解し，協働することにより歯科だけでは解決できない「食」の課題解決が実現可能となる事を多く経験してきた。

今回はこれまでに行ってきた具体的な口腔ケアマネジメント方法，多職種連携による食支援をとおした現状を紹介するとともに，生活支援を行う上での課題やこれから歯科衛生士に求められるであろう「口腔健康管理」の在り方について言及していきたい。

岸　さやか　先生

略歴

2002年	宮城高等歯科衛生士学院卒業
2005～2013年	特別養護老人ホーム，一般歯科診療所勤務を経て
2013年	一般社団法人仙台歯科医師会　在宅訪問・障害者・休日夜間歯科診療所　現職
2020年	東北大学大学院歯学研究科加齢歯科学分野　在籍中

住み慣れた地域での“生活”を支える歯科訪問診療

仙台歯科医師会 在宅訪問・障害者・休日夜間歯科診療所
岸　さやか

近年，人々の口腔に対する健康意識が高まり，口腔の健康が全身疾患の予防や健康寿命の延伸に寄与することが広く知られるようになった。高齢期においても口腔内を清潔に保ち口腔機能を維持することで誤嚥性肺炎の予防につながることや認知症の発生リスクを低減させる効果があると示されている。

一方で，疾患によって障害を抱えたり，要介護状態に陥ったりすると従来のセルフケアや定期的な歯科通院が困難となり，口腔衛生状態や口腔機能は急速に低下する。要介護高齢者の多くが口腔内に何らかの問題を抱えているとされ，歯科受診の機会を失うと重症化するケースも少なくない。時間経過とともに食べ物を噛めない，飲み込めないなどといった摂食・嚥下にかかわる問題によって，誤嚥性肺炎や低栄養といった全身への影響を及ぼすようになる。歯科訪問診療では，ステージ（病期）とニーズに合わせた口腔評価を行い，歯科医師指示のもと歯科衛生士が単独で訪問し，生活機能を維持するための口腔管理を行っている。しかし，積極的なかかわりをもっても，低下した機能を改善させ維持するまでには時間を要し，その間に全身の問題も複雑化する。そのため，早期に歯科受診につなげ歯科医療とのシームレスな対応実現が重要であると考える。

当診療所は，仙台市中心部に位置し，歯科訪問診療のほか障害者歯科診療，休日夜間歯科診療を担っている。一般歯科診療と歯科訪問診療の大きな違いは，患者の「生活の場」で診療を行うことである。患者は「生活者」となり日常生活を過ごす場で行う診療は，多くの配慮が必要となる。生活環境や家庭環境，人生観なども反映させながらアセスメントを行い，本人や介護者が行う日常のケアやリハビリが負担とならないよう，個々に合わせたケアプランを提示する。同時に，介護支援専門員をはじめとする多職種と情報を共有し連携を図る。歯科だけの一方的なかかわりでは，患者の“生活”を支援することは困難であり，多職種連携は欠かせない。しかし，専門職種が揃う施設や病院と異なり，地域での多職種連携はそれぞれの専門職種が個々にサービスを提供するため，多職種との関係づくりや限られた時間の中での迅速な対応が難しい。顔の見える関係づくりは継続した課題である。

医療，介護，福祉の垣根を越えた一体的支援に加え，歯科×歯科連携の重要性が高まる中，歯科衛生士は何をすべきだろうか。本シンポジウムでは，当診療所における歯科衛生士の口腔管理や多職種とのかかわりを紹介し，口腔から住み慣れた地域での生活を支援する歯科衛生士に求められる対応や課題について検討したい。

前沢　葉子　先生

略歴

1992年	専門学校仙台歯科衛生士学院卒業
1992～1999年	一般歯科医院勤務
1996～2000年	仙台市泉区保健所寝たきり老人訪問歯科保健指導
2000～2005年	一迫町在宅介護支援センタ　介護支援専門員
2005～2010年	登米市歯科健康診査歯科保健指導事業（乳幼児）
2005～2006年	社会福祉法人宮城福祉会　特別養護老人ホーム山王 介護支援専門員
2006～2010年	同法人　在宅複合型施設さくらの里若柳　生活相談員
2011～2018年	社会福祉法人東北福祉会　特別養護老人ホームせんだんの館 歯科衛生士
2018年～	東北大学病院　診療技術部歯科技術部門歯科衛生士

東北大学病院歯科衛生士による要介護高齢者の日常生活支援の課題と展望

東北大学病院診療技術部歯科技術部門歯科衛生室
前沢　葉子

私は，一般開業歯科医院で歯科衛生士として勤務したのち在宅介護支援センター，特別養護老人ホーム，在宅複合型施設で介護支援専門員として勤務し，再び歯科衛生士として特別養護老人ホームそして現在は東北大学病院に勤務しております。歯科医療職としての経験と介護職としての経験を経て，ひとりひとりの健康や生活，支える介護と医療を提供するうえで口腔の健康を維持することの大きな影響を強く感じるようになりました。

東北大学病院は「患者さんに優しい医療と先進医療との調和を目指した病院」を基本理念に掲げます。歯科衛生士は「患者さんに優しい医療と先進医療との調和を目指した効果的な診療技術の提供」を理念とする診療技術部・歯科技術部門（歯科衛生室）に所属し，約140台の歯科ユニットを備える歯科外来で1日平均600名の患者さんに歯科保健，歯科医療を提供しています。厚労省の「特定機能病院」の指定を受ける本院の診療技術部は高度医療の安全な提供に資する観点から，職員に多岐にわたる病院機能を継続して担うジェネラリストであることを求められています。歯科衛生士も複数の診療科をローテーションする配置により，特定の歯科衛生士が離職しても業務に支障をきたさない体制を整えつつ，重度歯周病患者の継続的管理など高度で専門的な歯科医療の提供を可能にしています。中核的な高次医療機関という位置づけから，地域歯科医療によって担われるべき要介護高齢者の日常生活支援は口腔機能回復科が歯学部の臨床実習の一環として実施する歯科訪問診療への参画に限られます。一部の学生には他職種との連携の大切さを考える契機になり，その後に高齢者歯科を専門的に学ぶ学生も現れています。

患者の生活の場が病院，施設，居宅と変化するなか，患者を中心に，患者の生活を全体像として捉えつつ，その時々に必要で最適な口腔健康管理をシームレスに提供し，要介護状態に陥った高齢者の生活を支援する歯科医療職の役割は，ますます強まっていくと予想されます。高い知識とスキルを備えたスペシャリストの歯科衛生士を養成する教育を一層充実させることを，スペシャリストが活躍できる場を創出することを併行して進める必要があるようにも思います。大学病院が臨地実習の場を提供している歯科衛生士養成校と連携した教育内容の再構築や，在職する歯科衛生士の専門研修は，その具体的な方法ではないでしょうか。

こうした課題について，シンポジストや会場の皆様から有益なご意見を伺い，発展や連携につなげていきたいと思っております。